

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：23503

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13148

研究課題名（和文）大正・昭和初期の西欧詩の翻訳と日本近代詩の相関についての研究

研究課題名（英文）A Study of Modern Japanese Poetry and Japanese Translation of Western Poetry in the Taisho and the Early Showa Period

研究代表者

大村 梓 (Omura, Azusa)

山梨県立大学・国際政策学部・准教授

研究者番号：50639177

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では西欧詩の翻訳と日本近代詩の相関に焦点を当て、翻訳家堀口大学の活動を中心に大正・昭和初期の翻訳詩を分析した。大きな成果としては2023年1月に学術書（単著、『異国情緒としての堀口大学 翻訳と詩歌に現れる異国性の行方』）を出版した。翻訳者としてフランス近代詩を多く日本語に翻訳し、雑誌で紹介した役割と共に、堀口の歌人・詩人としての創作活動を学術的に検証した。堀口の詩歌や随筆が翻訳に与えた影響（文体、繰り返し用いられる単語、テーマ性などの点から）を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで翻訳家としての堀口大学の役割は広く認識されてきたが、個々の翻訳テキストが日本近代文学に与えた影響に焦点が当てられることが多かった。このような背景において本研究は訳詩集や日本近代文学という大きな流れのなかで堀口の文学活動全体を捉えなおそうと試みた。本研究は堀口の詩歌が翻訳に与えた影響を分析し、堀口の翻訳活動の重要な側面としてモダニズム文学、新感覚派に影響を与えたといわれる仏作家ポール・モランの堀口訳についても詳細に分析するという新たな視点を持っている。これらにより、本研究は日本近代詩とフランス近代詩、及び日本モダニズム文学をめぐる議論について新しい視点を提供できたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study examined how Modern Japanese poetry was influenced by Modern French poetry through translation focusing on Horiguchi Daigaku. The book, *Ikoku jocho to shite no Horiguchi Daigaku (Horiguchi Daigaku and Exotic Atmosphere, Azusa OMURA, 2023)*, investigates the link between his role as a translator and his creative activity as a poet. It reveals that the writing of his poetry affected his translations in terms of a style, words and themes.

研究分野：比較文学、比較文化

キーワード：堀口大学 翻訳 日本近代詩 フランス近代詩 モダニズム文学 ポール・モラン

1. 研究開始当初の背景

これまでは堀口大学の翻訳から日本近代詩や日本モダニズム文学への影響について、個別の訳文を取り上げ考察されることが多かった。堀口の翻訳活動を日本近代文学史の流れと共に総合的に研究する積極的な試みはあまりみられない。国内の研究者によって基本的な資料の収集・整理は行われ(堀口大学、安藤元雄/飯島耕一/窪田般彌/平田文也編『堀口大学全集』小澤書店[1981年—1988年])、個々の訳文が分析の対象とされている。このような学術的背景の中で本研究は翻訳詩の文体及び題材を研究対象とした¹。

本研究は次の二点を中心に大正・昭和初期の西欧詩の翻訳と日本近代詩の相関を明らかにする。

[1] 詩の文体と題材から導き出される訳詩集の特徴の変化：明治において西欧文学の翻訳は積極的に行われた。明治以降、代表的な西欧の詩の訳詩集、外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎訳『新体詩抄』(1882年)、新声社訳『於母影』(1889年)、上田敏訳『海潮音』(1905年)、永井荷風訳『珊瑚集』(1913年)、堀口大学訳『月下の一群』(1925年)が次々と発表された。それぞれの訳詩集は当時の文学の潮流、文体と所収する詩の取捨選択によって異なる特徴を持つ。若手文学者たちは訳詩集から新しい表現のあり方を学び、自らの作品で実践した。本研究はそのなかでもフランス近代詩の訳詩集として名高い『海潮音』・『珊瑚集』・『月下の一群』における所収詩の文体と題材を仏語原文と照らし合わせ比較分析し、導き出される訳詩集の特徴の変化を問う。[2] 詩の文体と題材に焦点を当てた翻訳詩と自作の詩歌の相関：翻訳の前にもともと詩歌の創作から文学活動を始めた堀口は自作詩集『月光とピエロ』(1919年)や雑誌掲載作品に見られるように、口語を用いて詩を作っている。堀口の作品の特徴として、与謝野晶子や吉井勇をはじめとする新詩社の新しい近代短歌の影響を強く受け、伝統から切り離された若者の新鮮な観察眼がみられる。『月下の一群』以前に発表された堀口の自作の詩歌から翻訳詩を考察することによって、日本近代詩から翻訳詩への相関を問う。

2.

(1) 研究の目的：本研究の目的は西欧の詩の翻訳と日本近代詩の相関を明治以降の訳詩集の特徴の変化、および堀口大学の自作の詩歌をもとに解明することである。『海潮音』、『珊瑚集』、『月下の一群』には共通した詩人が取り上げられている。共通した詩人の同じ作品、もしくは異なる作品が翻訳されている場合がある。そして時代や目的に応じて文体を選択しているため訳詩集ごとに特徴を持つ。本研究は堀口訳『月下の一群』所収詩の文体と題材を仏語原文・他訳詩集と比較し、訳詩集の特徴の変化を明らかにする。また先人の訳詩集は西欧の詩を学ぶ啓蒙書としての性質が強いものに対して、堀口の訳詩集にはフランスをはじめとするヨーロッパ諸国滞在時に現地で読み親しんだ詩が多く所収されている。『月光とピエロ』等の自作詩集、および雑誌(『スバル』、第二次『明星』、『三田文学』等)に掲載された自作の詩歌と翻訳詩を比較することにより、新詩社や日本近代詩に影響を受けた堀口自身の創作における文体が訳文へ与えた影響を分析する。

(2) 本研究は従来の評伝や個別の翻訳テキストの解釈を中心とした堀口大学研究ではなく、明治以降の訳詩集の流れを研究枠組みとして用いる。本研究は訳詩集を西欧文学受容の重要な一部と捉え、その流れのなかで堀口の翻訳詩を分析する。これまで翻訳詩から日本近代詩へという一方向で語られることが多かった従来の影響関係から、近代短歌・日本近代詩を経験した堀口が翻訳を行うことにより日本近代詩から翻訳詩へという逆方向の視点を提示する。つまり翻訳者である堀口が日本の詩歌(近代短歌・日本近代詩)の文学の潮流によって受けた影響が訳詩にも及んでいると考えるのだ。本研究により西欧の詩の翻訳と日本近代詩の相関に新たな視点を提供できると考える。

3. 研究の方法

(1) 詩の文体と題材から導き出される訳詩集の特徴の変化：訳詩集の時代ごとの変化を所収詩の文体と題材の比較分析から考察していく。具体的には次の点に焦点を当て分析を行う。①上田敏訳『海潮音』、永井荷風訳『珊瑚集』、堀口大学訳『月下の一群』の所収詩リストを作成する。文体や題材についても情報を整理しておく。②共通して取り上げられている詩人の作品リストを作成する。③各訳詩集の特徴を仏語原文との比較(文体と題材に着目)、また訳者前書きや後書き、評論・エッセイ等から考察する。④三つの訳詩集に共通する詩人の作品を仏語原文と比較し、文体や用いる語彙、頻繁に取り上げられる題材について詳しい分析を行う²。

¹ 本研究の着想にいたる背景として、堀口と日本近代文学の関係と堀口の翻訳の姿勢について、大村梓「翻訳家堀口大学を巡る一考察—ポール・モーランという言説」『山梨国際研究』(山梨県立大学国際政策学部紀要)、第11号、2016年、1-11頁で取り上げている。

² 本研究課題に取り組むにあたって、大村梓「詞華集としての西欧詩の訳詩集：堀口大学編訳『月下の一群』を中心に」、『山梨国際研究』(山梨県立大学国際政策学部紀要)、第14号、2019年、11-21頁で試みた訳詩集間の比較考察が活用された。

(2) 詩の文体と題材に焦点を当てた翻訳詩と自作の詩歌の相関:『月下の一群』出版以前の自作歌集・詩集(多くが雑誌に掲載された詩歌をまとめたもの)と雑誌(『スバル』、第二次『明星』、『三田文学』等)に掲載された自作の詩歌を中心に翻訳詩との相関を明らかにしていく。具体的には、①『月下の一群』発表までに掲載された自作の詩歌のリストを詩集と雑誌ごとに作成する。②それぞれに対して文体と題材の整理を行う。③主に『スバル』、第二次『明星』、『三田文学』の文学的特徴(創刊の辞と掲載詩から考察)と堀口の自作の詩歌の特徴の関連を分析する。④自作の詩歌と(1)で明らかになった訳詩集の特徴を比較考察し共通点と相違点について分析する。以上のように、堀口の自作の詩歌の分析を用いて明治以降の訳詩集の流れのなかで翻訳詩と日本近代詩の相関を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 堀口は新詩社の影響のもと、文芸誌『スバル』を中心に短歌から創作活動を始めた。その後、フランス近代詩・フランス文学の翻訳へと活動を広げていった。長期にわたる異国滞在は堀口の文学活動に強く影響を与えた。異国に滞在することにより、堀口は生活の一部として西欧文化を身近に体験した。堀口は1909年に新詩社に入り、佐藤春夫らとも交流している。1911年に外交官の父親の任地メキシコへと旅立ち、その後、スペインやベルギーにも滞在している。異国の地からも精力的に詩歌や訳詩、訳文を日本の文芸雑誌に寄稿した。1918年からはブラジルに滞在し、1923年に帰国するまでの約5年間、海外から第二次『明星』、『三田文学』などに詩歌、訳詩・訳文を発表している。海外に滞在する堀口の日本語訳は、当時の日本語読者には異国情緒が漂う魅力的なものに映ただろう。1922年には、後に日本モダニズム文学、新感覚派に影響を与えたといわれるフランスの作家ポール・モランの作品を翻訳して発表している。その後、堀口はモランの作品を複数翻訳する。堀口は訳詩集『月下の一群』を1925年に発表する。この作品に代表されるように現在も知られている堀口の代表的な業績はフランス近代詩の翻訳であり、『月下の一群』がその代表だと考えられているだろう。だが堀口はこの翻訳詩集の前にモラン著『夜ひらく』の日本語訳を出版している。堀口が詩歌に新しい表現を積極的に取り入れたことと、日本モダニズム文学の新しい文体の創造に関わったことには、新しい文体と主題への関心という共通点を見いだすことができる³。以上のように、堀口の翻訳活動の共通点を日本近代文学史の流れと共に明らかにした。

(2) 堀口は1925年に外交官を退官した父親とともに日本に帰国した。前年の1924年7月にモラン作堀口訳『夜ひらく』を、1925年9月には訳詩集『月下の一群』を出版している。時代の差もあるが、堀口の訳詩には、他の訳詩集と比べて口語体を用いて軽い調子で訳されているものが多い。近代短歌に影響を受けて文学活動を始めた堀口の作風の特徴がみられるといえるだろう。日本の伝統的な語彙とは異なった軽い調子の訳詩は、戦後も若者たちの理解を促進し、読まれ続けるものとなったのであった。先人の訳詩集と『月下の一群』の大きな違いとして、①堀口の訳は軽さや自由さを内包している、②『月下の一群』は読者としての堀口が異国の地で親しみ楽しんだ詩が所収されている、ということがあげられる。『月下の一群』は日本近代詩にとって重要な存在であることはよく知られていることである。堀口が新詩社を通して近代短歌になじんでおり、詩歌も創作していたという文学的背景からみると、『月下の一群』は近代短歌・近代詩への文学の流れからも影響を受けているといえるだろう。そして堀口の訳文の特徴をより検証するために、堀口が熱心に訳したモランの作品の訳文テキストの詳細な分析も同時に行った。原文と日本語訳を詳細に比較分析していくと、比喩が多く翻訳の難しいモランの文体と当時のヨーロッパの現実を描いた物語の魅力をも日本語読者に伝えるために苦心していることがわかる。原文と日本語訳には表現の違いなどの差はあるものの、堀口が考えるモランの「新しさ」に沿うように訳されている。また、堀口の一定の言葉への傾向がみられた。モランの特徴的な文体を日本語読者に伝えるために、堀口訳では同じ言葉の繰り返しを用いて場面の情感を強調している箇所がみられた。その過程で特に「わななく」という言葉が頻出していることがわかった。これはモランの作品の翻訳だけではなく、訳詩にもみられる傾向である⁴。近代短歌・日本近代詩への流れを経験した堀口の自作の詩歌の分析から翻訳の分析を行うことにより、日本近代詩から翻訳詩への影響を明らかにすることができた。以上のように、翻訳者である堀口が日本近代詩への流れによって受けた影響が訳詩にも及んでいることがわかった⁵。

³ (1) で記した内容全体については、大村梓「第2章文学青年・堀口大學」『異国情緒としての堀口大學：翻訳と詩歌に現れる異国性の行方』青弓社、2023年で詳述した。

⁴ この点については、大村梓「堀口大學の訳詩と創作詩の相関についての一考察：訳者の異国体験の追体験の場としての『月下の一群』」『山梨国際研究』(山梨県立大学国際政策学部紀要)、第16号、2021年、25-33頁で論じた。

⁵ (2) で記した内容全体については、大村梓「第3章日本に帰国後の活動」・「第6章ポール・モラン作品の堀口大學訳」前掲『異国情緒としての堀口大學：翻訳と詩歌に現れる異国性の行方』で詳述した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 大村梓	4. 巻 16
2. 論文標題 堀口大学の訳詩と創作詩の関連についての一考察：訳者の異国体験の追体験の場としての『月下の一群』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山梨国際研究：山梨県立大学国際政策学部紀要	6. 最初と最後の頁 25-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 3件／うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Azusa OMURA
2. 発表標題 Poesie et autres formes artistiques - de la poesie japonaise moderne a Saihate Tahi（詩と芸術：日本近代詩から最果タヒまで）
3. 学会等名 GEO, l'Universite de Strasbourg（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Azusa Omura
2. 発表標題 Transcending the Genre of Poetry: a Contemporary Japanese Poet, Saihate Tahi, in the Context of Modern Japanese Poetry
3. 学会等名 Symposium: Translating Contemporary Japanese Poetry (DFG Center for Advanced Studies FOR 2603)（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Azusa Omura
2. 発表標題 Isolation from Japanese Literary World: Horiguchi Daigaku's Japanese Translation of Modern French Poetry
3. 学会等名 Seminaires 2019-2020 du Groupe d'Etudes Orientales de l'Universite de Strasbourg（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大村 梓
2. 発表標題 エキゾチシズムに内在する暴力性：堀口大學と日本文壇（「内包される暴力表象 - 他者・異文化理解の側面から」、パネリスト）
3. 学会等名 日本近代文学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 大村 梓	4. 発行年 2023年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 258
3. 書名 異国情緒としての堀口大學 翻訳と詩歌に現れる異国性の行方	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------